

絵画であり、見本帖一「古錦」の小宇宙

アートの現場から

ACAC通信

枚ずつ見るようになつた。

「コギンに関する」とでし

ん。コギンを「刺繡」と書いた柳宗悦とは対照的です。この文章の中で大川は「支那模様であるサヤ形の存在は注目に値する」とも述べています。凸を斜めに

新型コロナウイルス感染症の拡大を受け、残念ながら1月23日まで一般公開を終了しましたが、国際芸術センター青森（ACAC）ではヴィ・ジョン・オブ・アオモリ特別編「大川亮コレクション」生命を打ひ表へもある大川は、元々洋画着せるために生命や魂を打ち込んでいました。いわば、ケラとコギンは「若者達の自己の表現」の交換／交歓だったのでしよう。

東京美術学校に学んだ」とも、ある大川は、元々洋画編んで、未来の結婚相手に

現」を開催しました。本展では、大川亮（1881—1958年）の農閑期における副業品開発の基となつた郷土の工芸品、特にオリゲラやコギンを中心とするコレクションを、彼がいかに見ていたのかということを意識しながら展示を作り

を志していました。郷里に戻り、農閑期の副業品という「作品」をプロデュースし農民と協働するようになつても、彼らが生み出したケラやコギンの中に、それぞれの「表現」を見ていなうです。まるで絵画を

グが合致しているものは少ないのですが、地域で模様がどのように呼ばれていたか記録していたこと、分類されている模様には「くろ（津軽弁で田の畦道）柄が多くの含まれることが分かります。

頃が1枚あり、試しにそれを中心に置いて模様の類似と発展を意識してみると、自然と「くろ」や「井桁」といった柄に展開し、端の部分はモドコのような基礎模様に戻っていきました。市は様々な宗教で使われ、力や和の元という意味でも用いられます。

大川亮は青森の工芸についていくつか文章を残していますが、ケラについても『工藝』30号（1933年、同年の「木村産研時報」第3号もほぼ同内容）に、コギンについては「郷土誌むつ』第1号（1931年）に詳しく書いています。この二つの文章は、おおよそ対になっており、農作業の合間に女性はコギンを刺し、男性はケラやハバキを

古作エギン108景の展示  
風景（撮影：小山田邦哉）



「」の大川のテキストは、「古錦の話」という題名ですが、「錦」は種々の糸で文様を織り出したものの総称で、この独自の当て字は大川がコギンをして捉えたかったことを表しているに違いありません。

※第1金曜日掲載。今回は都合により変更しました

展覧会を契機に大川家に残った「ゴキンの身頃を一巻に並べ、想像しうる大川」に並べ、「ゴキンへの眼差しを反映して、一枚の絵画のようにもそれが差異が浮かび上がる見本帖のようでもあるように配置したことで、大川亮が思い描いた模様の宇宙の謎に少しだけ触れられた気がしました。

(青森公立大学国際芸術センター青森学芸員 慶野桂香)